

## 第2回音楽科研修会 会場：浜北文化センター

今年度の研修会は、4年ぶりの終日開催となりました。午前には実践発表と指導主事による指導講評、午後は3グループに分かれての実技講習を行いました。

### 実践発表 「わくわくする音楽科の授業づくり ～自ら学ぶ・自ら仲間と関わる姿を目指して～」

5・6年生での2か年を通じた実践について発表がありました。

5年生では、「人気曲との比較でわくわく」「マッチングゲームでわくわく」など4つの実践に取り組みました。「人気曲との比較でわくわく」では、古くから親しまれている日本歌曲と現代の人気曲を比較する活動を通して、現代曲は抑揚と語感が必ずしも一致していないことに着目し、日本歌曲が自然で語りかけるような旋律をもつことに気付かせることができました。生活の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成するための手立てとしても有効でした。「マッチングゲームでわくわく」では、共通教材である

『冬景色』と『スキーの歌』を2曲同時に提示し、歌詞や旋律からそれぞれの曲想を思い浮かべる活動を行いました。ゲームを通して、主体的に歌詞や旋律と曲想との関係について考えることで、2つの楽曲をどのように歌いたいかについての思いをもつことにつながりました。

6年生では、技能の習得と表現の工夫をする時間に関連させ、一体的に高めていくため、「音色屋になっていろいろな音色を感じ取ろう」の実践を行いました。児童一人一人が音色の売り手と買い手になり、自分が表したい音色をもつ友達を誘って合奏をする活動です。子供たちは、楽器の音色や旋律、音の重なりに着目しながら、どの楽器で演奏すれば自分の思いや意図を表現することができるか考え、練習に取り組みました。演奏するパートのもつ旋律や、曲想にふさわしいと思う楽器や叩き方、弾き方を自分で選んで工夫することで、合奏することの楽しさを味わいながら、指導者がねらいとする「音色を感じ取る」学習に主体的に取り組むことができました。

参加者からは、「課題との出会わせ方がよかった」「発問の大切さに改めて気付かされた」等の感想が挙がりました。また、「音楽を形づくっている要素に関しては、一方的な指導になりがちだが、子供に必要感をもたせ、より主体的な学びにつなげていきたい」という意見も挙がりました。

### 指導主事より 指導講評・講話

～「自ら学ぶ姿」をイメージし、授業をデザインする～

「自ら学ぶ姿」とは、答えがあるようで一つではないため、自分が授業を構想する際に、「指導する子供たちが自ら学ぶ姿とはどのような姿であるのか」を思い描くことが大切です。音楽づくりにおいては、子供自らが表現したい演奏を追求し、丁寧に相手に伝える姿、考えたリズムを何度も繰り返し伝え、練習を重ねる姿などが、子供が自らの学びをコントロールし、主体的に学びに向かう姿であると捉えられる、とお話をいただきました。



～指導主事からのアドバイス～

① 実感を伴った理解

「できました。」「分かりました。」で終わらない、実感を伴った学びの積み重ねが重要です。技能の教え込みにならないよう、表現や鑑賞に生かすことのできる、必要感のある学習活動の場を設定することが大切です。音楽づくりにおいては、友達と何度も音を試し、納得する音を見つけるまでの過程が、必要感を伴った技能の習得につながります。

② 知性と感性の両輪で育成する

「知性と感性の両輪で育成する」とは、知性と感性の両方を働かせて対象を捉えることです。多くのアイデアを生み出す思考は、完成や知性に基づく独創性と対話を通じて、更に世界を広げることにつながります。

**実技講座** 音楽づくり講座 ～音楽文化と豊かに関わる資質能力を育成する～

筑波大学付属小学校より講師をお招きし、鍵盤ハーモニカや打楽器を使った音楽づくりについて講話をいただきました。

① 対話する音楽づくり

音楽づくりは、子供が創造性を発揮できるようにすることが大切です。今持っている力で勝負できるのも、音楽づくりのよさなので、「できる人?」「分かった人?」と聞かず、「挑戦したい人?」と尋ねることで、子供の意欲を高めることができます。また、打楽器との出会いにおいても、初めから持ち方や鳴らし方を指示すると、子供の可能性や創造性、表現力を狭めてしまいます。まずは、鳴らしてみる、触ってみることで、子供が「楽しい」「面白い」と感じさせることが大切です。「いちばん美しい音を出してごらん」と問いかけることで、子供はどうしたらよいか、真剣に考えるようになります。



② 鍵盤ハーモニカとの出会い

鍵盤ハーモニカの指導では、技能を身に着けさせることに重きを置きがちですが、見て、触れて、吹いて、鍵盤ハーモニカを楽しみと感じさせることが大切です。最終的には技能を身に着けさせることも大切ですが、どのように学習内容と出会うかによって、子供の学びに向かう姿は大きく変わっていきます。苦手な子でも参加できる、楽しめるように、活動を仕組み、子供を丁寧に看取っていくことで、子供の創造性を引き出し、主体的に音や音楽に関わる子供を育成することにつながると感じます。



「分かる」よりも「楽しい」を目指すこと、導入を丁寧にいき、子供の意欲付けを図ること、「指示」ではなく、子供に選択権のある「問いかけ」をすること、子供を丁寧に看取り、どんなことでも最初にやった子、言われる前にやっていた子を認め励ますことなど、他の教科にもつながる指導法を数多く教えていただきました。2学期からの指導に生かしていきます。

## **実技講座** 合唱指導講座 ～“伝える”を中心に、主体的に表現する合唱～

主に中学校教員を中心とした合唱指導講座では、合唱指揮者の田中安茂先生をお招きし、実際に校内合唱コンクールや文化発表会等で扱われるクラス合唱曲4曲を用いた実践的な講習を行いました。体ほぐしやコミュニケーションの活動から発声の基本、曲想の深め方まで、講師の先生との対話を通して進めていく実技講習は、実際の授業をイメージしやすく、とても有意義な時間となりました。



### ①発声の三大要素 ～共鳴・声帯振動・呼吸～

合唱における発声の三大要素（共鳴・声帯振動・呼吸）を教師が正しく理解し、児童生徒の実態に合った指導を選択することの大切さを学びました。例えば、「響きのないしゃべり声のような発声」が課題である場合、「共鳴」の要素に着目をし、絵画「ムンクの叫び」のように顔を左右から手で押さえたり、頬を奥歯の間に押し込んで喉の奥を開いたりして歌う等、声帯より上の空間（軟口蓋や鼻腔）を広げることが重要になります。目の前にいる子供が感じている困り感を教師が正しく理解し、最適な手立てを講じていく必要性を改めて確認しました。

### ②日本語の「ディクシオン」を意識した表現の工夫

合唱曲には必ず歌詞があり、その歌詞の内容がはっきりと聴衆に聴こえるように発音する必要があることを学びました。言葉そのものにイントネーションがあり、助詞や助動詞といった「直接意味を持たない文字」をもつ日本語は特にこの発音が難しく、「ディクシオン」と呼ばれる、朗読するように歌う発音方法が極めて大切です。語頭はすくうようにゆったりと歌い、語尾は少しゆらがせておさめる等、日本語の歌詞をより美しく表現するためのテクニックを多数紹介していただきました。



端的かつ的確なアドバイスで、瞬く間に声が変わっていくことを体感することができました。指導する立場になると、つい理屈っぽいアプローチになってしまうことも多い合唱指導ですが、子供の実態に合わせた丁寧な手立てを積み重ねていくことが大切だと気付きました。2学期以降も、楽曲そのものと、子供たちのもつ可能性を最大限に引き出す授業づくりをしていきたいです。